

延徳三・四年の織田敏定と細川政元

—『朝倉家記』所収文書を通して見る十五世紀末の幕府政治と尾張—

松 島 周 一

一、問題の前提と所在

応仁元年（一四六七）からはじまり十年あまりもつづいた応仁・文明の乱は、日本史上でも重要な出来事として知られている。これによつて室町幕府の中央政權としての体制は崩れ、全国各地で群雄割拠の流れが強まったと一般に理解されているし、それはおおよその方向性としては正しい理解であろう。ただ、たとえば尾張・三河といった愛知県域の当時の歴史像を考えてみようとすれば、その政治的・軍事的な様相は幕府政治の動きと切り離して見ることはできないという視点が多くの研究者にとつては普通であり、近年刊行されている自治体史なども、そうした視点に立ち、それを深める形で叙述を進めている^①。筆者も、それらの驥尾に付しての試論を述べたことがあった^②。その意味では、十五世紀後半から十六世紀前半にかけての愛知県域の歴史は、なお今後の検討に多くの可能性が秘められてい

るのであるが、そうした歴史像を具体的に描いていく材料の一つとして、小稿で取りあげる『朝倉家記』（以下『家記』）所収文書^③を位置づけることができよう。

これは題名からも推測できるように、越前の戦国大名であつた朝倉氏に関わる文献であり、その前半はいわば軍記物といった体裁であるが、後半部には大量の文書の写などが収載されており、その範囲は応仁の乱の時期から、幕府政治の劃期となる明応の政変（一四九三）直前にまで及ぶ。一九七〇年代から学界に紹介され、朝倉氏や幕府政治史の研究などに引用される史料であるが、注目したいのは、ここに当時の尾張守護であつた斯波義寛と同守護代の織田敏定が、かなり重要な関係者として登場してくることである。すなわち当時の尾張と関わる諸勢力の歴史を描くという立場から見ても、この史料はそれを幕府や他地域の歴史となし、より豊かなものにしていく可能性を蔵しているといえよう。管見の限り、これまでそうした視角からの当該史

料の検討は必ずしも進められては来なかったように思える。^⑤小稿では尾張側の視点からこの史料群を活用するための基礎作業として、ここから窺える斯波義寛や、特に織田敏定の立場、活動などについて、他の史料とも照合しつつ、事実関係の確認を進めておきたいと思う。その中では、これまでの研究で知られてきている事柄の紹介や検証となる部分、背景を見るための概説的部分などが冗長となつてしまふ点もあることはお断りしておきたい。

まず、なぜ『家記』所収文書に織田敏定らが登場してくるのか。もともと斯波氏は室町幕府の発足当初から、ほぼ一貫して越前の守護職に就いており、のちに尾張や遠江の守護を兼ねるようになったのである。尾張の守護となったことが確認できるのは応永七年（一四〇〇）からであり、当時の当主はやがて幕府の管領なども務めることとなる斯波義重であった。^⑥この斯波氏を支える有力な家臣として朝倉・織田・甲斐などの諸氏があり、おおよそのところでは斯波領国のうちで甲斐が越前、織田は尾張にその勢力を広げていったと捉えられよう。

享徳元年（一四五二）に斯波義健が十八歳で没したあとをうけ、斯波義敏が家督を嗣いだのであるが、彼は越前守護代甲斐将久（法名常治）と対立し、長祿二・三年（一四五八・九）には越前などを舞台に両者が軍事衝突を起こす

までの事態となった。^⑦その中で、越前国内での勢力を強固にしていたのが朝倉孝景であった。一方、この混乱は義敏に対する將軍足利義政の激怒を招き、そのため義敏の息子である松王丸が家督を嗣ぐ事態となつていたようであるが、さらに寛正二年（一四六一）に至つて、幕府の介入により松王丸は退けられ、洪川義鏡の息子である義廉が新たに当主となった。^⑧この背景には、洪川義鏡が補佐する堀越公方足利政知を支えるための軍事力として、斯波領国遠江の兵力をせおうとする幕府の方針があつたことが指摘されている。^⑨しかし、このために斯波氏の内部では復権を目指す義敏側と義廉側の間で家督をめぐる対立が尾を曳くこととなり、やがてそれが幕府の有力者の対立や足利將軍家の後継者争いとも結びついて、応仁の乱を引き起こす要因の一つともなつていった。

この乱においては、義敏が東軍に与した一方、義廉は西軍の一員となった。その争いが尾張にも波及し、それまで守護所があり尾張の政治的地でもあつた下津（稲沢市）の焼失・清洲の築城、そこに拠つた織田大和守家と岩倉に拠る織田伊勢守家の対立といった展開を招来することになったのである。そうした現地の混乱は越前でも同様であり、その中で現地支配を確立していったのが朝倉孝景であつた。彼は当初、斯波義廉に属し西軍の有力な武将とし

て活躍したが、東軍からのさまざまな働きかけを受け、文明三年（一四七一）に至って東軍に寝返った。しかし、東軍の斯波義敏とは対立したままで越前の実質支配を進め、甲斐氏の勢力も駆逐し、自らは文明十三年（一四八一）に没したものの、後継の氏景・貞景によって、朝倉氏による越前の領国化はほぼ完成されたのである。¹³

しかし、乱のち尾張に拠点を置いていた斯波義敏の息子義寛（もとは義良）はこうした展開に不満を抱き、尾張守護代である織田敏定とともに、事態を打開する機会を窺っていた。彼らは幕府に訴えることや、將軍との密接な関係を築くことなどでその目的を実現しようとしていたのであり、ここに、当時の尾張諸勢力の歴史が、越前朝倉氏の動向や幕府の中央政局と連動して展開する素地があった訳である。それらの様相を知るための史料として『家記』所収文書を位置づけることができる。具体的には、応仁・文明の大乱のちも、尾張の地域史は幕府政治や遠隔地の各勢力の動向と絡めて検討されなければならないことを、われわれに示してくれる事例として、この史料群が伝える長享元年（一四八七）や延徳三年（一四九一）から四年にかけての出来事は大変興味深いものであると思われる。それらの過程において、これまではある意味で脇役として捉えられ、描かれてきた斯波氏や特に織田敏定らに照明を当

ていくと、逆に当時の幕府政治などについて従来とは異なる知見を得ていくことも可能ではなからうか。小稿はそうした可能性についての試論でもある。¹⁴

二、『朝倉家記』の文書群

『家記』所収文書は全体をおおよそ四つのグループに分けることが出来る。

I 応仁二年（一四六八）から文明七年（一四七五）にかけて、朝倉孝景・氏景らに与えられた將軍足利義政や管領細川勝元、將軍側近である伊勢貞親・貞宗などからの文書類二十九通。東軍から孝景への内応を求める働きかけと、東軍方に属した孝景に越前の支配を認め、その活躍を称える内容のもの。特に文明三年に孝景を越前守護職に任じた足利義政御内書と管領細川勝元によるその副状などが含まれる。

II 長享元年（一四八七）十二月、九代將軍足利義尚の六角征討の陣営にあった斯波方と朝倉方の調停を細川政元が行なおうとし、それに斯波方の織田敏定が反論、さらにそれに対して朝倉方も反論を加えたことの記録。

III 足利尊氏・義詮や細川勝元から朝倉に出された文書、朝倉孝景の書状など、朝倉氏の歴史や幕府関係者との繋

かりを示す文書九通。

IV 延徳三年（一四九一）から四年にかけて、十代將軍足利義材（のち義植。小稿では義材に統一する）の六角征討を背景として、細川政元や織田敏定、朝倉氏の間での対立と駆け引きの動向が窺える四通の文書。尾張の視点から見ると、特に興味深いもの。

それぞれのグループの關係を見ておくと、IIの対立を経て、IVの段階で再び幕府（特に將軍足利義材）に訴え朝倉打倒と越前支配の奪回を図ろうとした斯波方、特に織田敏定の活動により、窮地に追い込まれた朝倉方が、自らの家の功業と権限の正統性を幕府に主張するために提出したのがIのグループであった。IIIもそこに附屬するものであるうか。

以下、小稿ではIIとIVの部分を取りあげることになる。ところで、これらの文書は興味深いものであるが、その信頼性についてはこれまでもいくつかの議論がなされてきた。その際、特に問題とされたのはIグループの、文明三年に朝倉孝景を越前守護に任じたとの内容の足利義政御内書と管領細川勝元副状などであった。これは孝景が越前守護に任じられたのか否かという問題を考えるための論点なのである。これらを信頼できる史料と捉える立場からは、孝景が越前守護となったことが肯定されるのであり、逆に

疑文書とする論者は、孝景が越前守護となったことはない、との主張を行なう。⁽¹⁵⁾ この対立は今日まで決着が付かないままに來ているといえようし、小稿でもその点について言及する準備はない。重要なのは、管見の限り、『家記』所収文書の中で、真偽が必ずしも判然としないとされているものは他にないことなのである。すなわち、尾張の歴史にとって重要であると思われるIIやIVのグループについては、これまで信頼性に問題があるとの見解が示されたことはなかったのである。筆者の目から見ても、IIやIVの部分に史料価値の疑わしい点は特に見あたらないと思う。だからこそ、これらの史料はこれまで以上に、尾張の歴史を語ろうとする側からも活用していくべきものといえる。小稿で取りあげる所以である。

三、長享元年の相論

さて、朝倉孝景による越前支配（彼が守護職に任じられたかどうかは別として、実効支配という点で）を打破しようとする斯波義寛と織田敏定にとって、その機会が訪れたのは長享元年（一四八七）の、將軍足利義尚による近江出陣に際してであった。この年九月、義尚は近江の六角高頼征討のため出陣し、月末には斯波義寛も織田敏定らとともに

に五千から八千もの兵を率いて尾張から参陣した。⁽¹⁶⁾さらに十月には朝倉の兵も参陣しており、いわば仇敵同士が將軍の下に集う形となった。そのため、幕府としてもその調整に動かざるを得なかったのであるう、十二月になって、幕府の有力者である細川政元の指示が出され、織田敏定、そして朝倉氏との間で遣取りがあった。『家記』所収文書のうち、前掲のⅡに当たる部分である。以下、その内容を紹介していく。これまでの研究史でも述べられてきたものであり、小稿で殊更に目新しい論点を提示する訳ではないが、次章以降で触れる延徳三年段階での展開がどのような意味を有するのかを明確にする前提として、やはり押さえておく必要がある。そのため、この時の斯波・織田方と幕府（細川方）が、朝倉氏に対してそれぞれのどのような意識と姿勢を示していたのかを中心に、最小限の言及を行なっておきたい（なお、『家記』では引用する文書や覚書に送り仮名や返り点が小さく書き込まれているが、それらは写の作成過程で付せられたものと思われ、誤りと見られる書き込みもある。それらの訂正などの煩雑を避けるため、小稿の引用ではすべて省略する）。

去二日、從細川殿、為兩使〔寺町三郎左衛門尉、齋藤々兵衛尉〕、飯尾彦右衛門尉被申置分、

越前国事、朝倉者以忠節奉公罷成候間、於今為其分

国事ハ、武衛江進名代、守護代を彼名代相拘、国之公用錢被定、落居候者可然之由、為 上意可申之旨、被 仰出、

【一】内は割注。以下同】

まず細川政元から斯波義寛方の取次である飯尾彦右衛門尉に命が下された。⁽¹⁸⁾朝倉氏は將軍に対して「以忠節奉公罷成」す者であるのだから、それが越前を分国としている事実は変更を加えないことが大前提であるとした上で、形式的には朝倉方から「名代」を出して斯波方から守護代に任じてもらうこととし、朝倉は一定の「公用錢」を斯波方に支払う、との案を、將軍足利義尚の意向であるとして、「武衛」すなわち斯波義寛方に提示せよ、という内容であった。「公用錢」を払うにしても、朝倉方は当主の貞景が直接に斯波義寛に仕える形を取らずに済むし、何よりも將軍に「奉公罷成」す点で斯波方と並ぶ立場に身を置くことができる。従って、この調停案はやや朝倉寄りの案といえることができるかもしれない。これに対して、「此御返事、同十一日、以織田大和守、飯尾彦右衛門尉承候」と、斯波方を代表する形で織田敏定が、飯尾を介して細川方への返答を行なった。

就越前之儀、預御使候、祝着申候、惣別武衛御事、代々為御方、扶持今ニ不初事候、然此段幸御承之事候間、御祝着之至候、左候間、只今上意候旨何共不及覚悟候、

斯波家は足利將軍家の「御方」としてこれまでずっとお仕えしてきた家柄である、それが分かつている筈なのに今回の將軍家からの「上意」は納得がいけない、との、真つ向からの反論である。さらに敏定は主張する。そもそも応仁の乱で朝倉を味方に招く際、東軍の細川勝元さまは斯波家にこうお断りになった、「これは西軍を解体するための戦略で、もし大敵である朝倉でさえ、東軍は手厚く迎え入れ、將軍家にもお目通りできるような待遇を与えたとすれば、他の西軍諸將もきつと寝返るであろう」と。それゆえ斯波も了解したのであるし、実態としては朝倉は斯波の配下としての地位に置かれ、勝元さまへの報告も斯波を介さなければ出来なかつたのである（依其朝倉味方參候分、以後も国々合戦以下之注進等、何茂武衛江申、其より龍安寺殿（細川勝元）江申候キ）、と。そしてこうつづける。

既其朝倉（孝景）者死去仕候ニ、然を相続仕 公方奉公可仕之段、不被及覚悟候、自然就芸能被召仕事者、自然其例候哉、依ケ様之義正數被官殿中奉公仕候日、為如何武衛可有御出仕候哉、如此例、三職内として武衛之御家々可被始事、口惜候、……国之事者被相待時刻、雖被入御手、朝倉於殿中出仕申候者、被失面目候、縦武衛御許容候共、御内仁不可承引申候、又御内仁同心候共、武衛可被定御覚悟事候、……

【一】内は松島の注記。以下同】

そうした大乱時の戦略上の必要から斯波側も了解した、朝倉の將軍に対する形だけの直參奉公なのに、なぜ当事者であつた孝景が亡くなつたあとまで、その後継者が「公方奉公」を継承できるというのか。それは斯波義寛にとって決して受け入れられぬことである。軍事力があるから將軍のために役に立つ（就芸能）とは、このような意味であらう）などという理由で、かつての家臣であつた朝倉を、自分と同等な將軍への奉公人とされてしまつたら、斯波義寛はとても將軍にお仕えすることはできない。こんな恥辱はこれまで誰も体験させられたことは無い筈なのに、選り選つて管領を務める特別な家柄である細川・畠山・斯波のうちの斯波家に対してまず加えられるなんてひどすぎるではないか。これが敏定の言い分である。そこには、一度朝倉の立場を自らと同等な將軍への直參の奉公人と認めてしまえば、今後斯波家が朝倉方の行為を非難し、失地の回復を進めるための正統性が失われてしまうとの危機感が存したのであらう。だからこそ、越前の支配権回復については、いづれ機会が廻つて来るまで待つてから対応することもできるとしつつ、一方で朝倉方が「於殿中出仕申」すことに對しては、斯波義寛もその重臣である織田や甲斐の諸氏も承知できない、とより強硬な姿勢で非難しているのである。

総じて朝倉を將軍に「以忠節奉公罷成」す者であるとの前提に立つ政元からの提案には、絶対に従えないとの強い態度表明であった。これに対して朝倉方も、越前で作成した反論を長享元年十二月二十四日に提出しており（そのため、ここまでの政元の指示や敏定の反論が同年十二月のことと分かる）、長祿当時の斯波義敏の行動を厳しく非難して、既に朝倉は斯波から自立していたなどと主張している。

結局、この段階では対立する両者が主張をぶつけ合ったままで、斯波方にとっては何ら具体的な措置がなされることも無かった。『大乘院寺社雜事記』（以下『雜事記』）長享二年正月三日条に

楠葉新衛門尉元次參申云、旧冬廿九日自北国罷上云々、朝倉進退事、公方奉公分治定、千貫進上申之、寺社本所領悉以返進之、武衛与間事ハ不一決云々、細川申沙汰也、名字者一人可出細川之由、同申定云々、……

とあり、この相論は長享元年のうちに朝倉貞景の「公方奉公分」が認められる形で決着したことが窺える。織田敏定が（すなわち斯波義寛が）強く抵抗しつづけた一線が、細川政元の「申沙汰」によってあっさりとは蹴散らされた訳である。貞景は政元に依存することでこの対立を乗り切ると、一族の者を人質に出すなど細川寄りの姿勢を一層強めていくことになった。当然、朝倉方による越前支配の実情

にも何等の変化も期待出来ない訳であり、斯波義寛・織田敏定にとっては不得要領な結果であつたろう。

四、延徳三年の展開

長享の対立から数歳を経ずして、延徳三年（一四九二）から翌四年にかけて、再び幕府の下で斯波義寛・織田敏定と朝倉方とが対立し合うこととなった。その段階の史料となるのが、『家記』所収文書のうちIVにあたるものである。

A、去月廿六日御状、同晦日下着候、委細承候、依 慈照院殿様（足利義政）御内書・龍安寺殿（細川勝元）御状共、先度以賤建坊写進候処、内々被達上聞之由蒙仰候、先以畏存候、連々無御等閑給、本望二候、就其本文則雖可上進候、去月十八日甲斐五郎左衛門尉・雨川両使合力之事歎申候、近日出張一定之由二候、芳（旁力）以取乱候間、先御使上申、如何様追而自是可申入候、弥可然様安富殿江被仰談、御取合奉頼候外無他候、委細猶慈視院（朝倉光玖）可令申候、恐々謹言、

七月日

朝倉孫次郎

貞景

浦上美作守（則宗）殿 御返報

B、就越前之儀預御狀候、殊神山殿御下向候而巨細承候、

連々無御等閑候条、本望之至候、雖然承候分ニ而者、不可事行候間、不及是非候、所詮被止御綺_レ候者可然存候、如御存知之、種々為 上意一段被 仰出候之間、各致其覚悟候、委細猶神山殿可有御申候間、不能一二候、恐々謹言、

五月三日

織田大和守

敏定

浦上美作守殿

御返報

C、

上原父子（賢家・元秀）当国（朝倉氏）江以五ヶ

条異見申事、

一、越前国者無相違朝倉殿（貞景）成敗之事、

一、尾張国者織田大和守（敏定）可為成敗候、就夫浦上（則宗）方々神山を使として大和守方江申候処、如此大和守返事候、

一、遠江国者甲斐可為成敗之事、

一、二宮者大野郡斗望可申事、但慈視院御覚悟承度候由事、

一、武衛（斯波義寛）江貞景御参候而可然候、其以後公方江御望之儀候者、一年半過候者、上原父子可調法仕之由事、

以上

「右条々義者、貞景・同慈視院茂堅固ニ被仰放候、浦上同名を一乗江下候而異見申茂、此分御返事候、」

【「」は松島の付けた記号。以下同】

D、

就御参之義条々事、

一、当国聊于今不可相替之事、

一、甲斐競望可被停止之事、

一、二宮同前、但慈視院御覚悟之事、

一、此儀相定者、以身血房祇起請之事、

一、猶茂公方江被参度候者、一年半過而可申沙汰之事、

大概如此、猶巨細福乗坊申入候也、

延徳三

十月十八日

「上原父子以書狀孫次郎（朝倉貞景）殿江申入候五ヶ条之写、」

これらのうち、C・Dのそれぞれ最後に付せられた文（「」で囲んだ部分）は、もともとの文書にあったのではなく、それがのちに写された際に書き加えられた注記であろう。

また、Cの冒頭「上原父子当国江以五ヶ条異見申事」の部分は、上原から直接に朝倉方へ送られた書状の文言としては明らかにおかしい。これは注記の部分に「浦上同名を一乗江下候而異見申茂」とあつて、上原方と朝倉方の間に浦上則宗（この人物については後述）が介在していたことが窺えるように、則宗が前者からの意向を聞いてまづ、後者へと伝達した際の覚書ではなかったか。そう考えれば、四条目の「慈視院御覚悟承度候由事」すなわち朝倉光玖の覚悟のほどを聞いておきたいとのことである、との文言や、五条目の「一年半年過候者、上原父子可調法仕之由事」すなわちいづれ上原父子がうまく取り計らってくれるとのことである、などの伝聞的な文章の意味も理解される。また、Cにだけ日付が無いことも、これがもともと正式の文書ではなく、上原方と朝倉方の間をつなぐためのメモ的なものであったからと見れば問題はないであろう。なお、Cの年次比定については、内容的に重なる部分の多いDとの関係から考えて、延徳三年のものであることは動かないであろう。さらに筆者としては、その年九月の前半くらいまでのものと見なすのが妥当であると思う。その理由は後述するが、これが「貞景・同慈視院茂堅固二被仰放候」と朝倉方によって拒絶されたのち、情勢の展開に伴い、翌月に改めて上原父子から朝倉方に送り直されたのがDであつ

た。

次に、A・B二通の年次比定であるが、これは従来からAを延徳四年（一四九二）、Bを延徳三年に宛てていることに従うべきであろう。

まずAであるが、内容については後述するとして、「慈照院殿様（足利義政）御内書・龍安寺殿（細川勝元）御状共、先度以賤建坊写進候処」とあることから、年次の確定ができる。『家記』所収文書のIグループには、最後に

以上廿九通、延徳四年三月八日、飛脚中間四郎次郎上ル、越前国之儀付而申事、慈視院光玖書付、朝倉修理亮（景冬）在京候而、時宜承被申下候付而、此分被申上条々也、

との一文が付されている。これらの文書の写がなぜ作成され、幕府に送られたのか。それは、延徳三年の將軍義材の六角追討に際して、在京して近江の將軍や斯波方の動きなどを注視していた朝倉景冬が、朝倉方にとっての事態の悪化を受けて越前に報告を寄越したため、朝倉光玖が自分たちの主張の根拠となる文書（「越前国之儀付而申事」）を書き記し、飛脚に託して京都に送り、幕府へと届け出たのである、という。その時期が延徳四年三月であつた。AはIグループに属する「慈照院殿様御内書」「龍安寺殿御状」などを幕府に届け出たあとの書状なのであるから、延徳四

年七月と推定するしかない。翌明応二年（一四九三）では、四月から閏四月にかけて、既に明応の政変が起こっているから、Aのように朝倉方が低姿勢で嘆願する必要はなくなる。後述するように、この政変では、朝倉方は細川政元と新將軍足利義澄の陣営に属する勝者であったのに対して、斯波方は敗残の前將軍義材と近かったため、立場を弱体化させていたと思われるからである。

Bについては、「殊神山殿御下向候而巨細承候」の部分がC（前期のように、Dの延徳三年十月に近い頃のもの）と推定することができよう（二条目（「浦上方より神山を使として大和守方江申候処」）と一致するところから、同じく延徳三年のものと分かるのである。この年の前半に、上原賢家（彼は細川政元の重臣であるから、その行動は政元の姿勢を反映したものであろう）の意向をうけた浦上則宗が、使者の神山を送って織田敏定に働きかけ、それに対して五月三日付で敏定が認めた返答がBであった。ここまで何度か登場した浦上則宗は、播磨などの守護を務める赤松政則の宿老であったが、文明頃から幕府政治の中樞に関わるようになっていて、『家記』所収文書のIグループには、足利義政・細川勝元らの東軍と朝倉孝景を仲介する彼の書状も含まれている。この人物は織田敏定との関係も深く、その点についてはさらに後述する。話を戻すと、則宗からの働

きかけの内容は、越前について朝倉貞景の実質的支配という現状を承認することを求め、その代わりに敏定には同様な尾張の支配権を与える、というものであったと、Cから推測することができる。あるいは遠江について甲斐氏にも同様な立場を認めるとしたのかもしれない。すなわちかつての斯波家が守護であった三カ国を朝倉・織田・甲斐がそれぞれ実質支配し合う（その全体の主人として斯波義寛を戴く形を取るであろう）との構想であった。

しかし敏定はこれを拒否する。「承候分三而者、不可事行候間、不及是非候」というのであるから、神山がもたらした案では話が進まないし、こちらとしてはとても乗れないとのゼロ回答である。長享段階での敏定の対応を考えれば、むしろ自然な結果であろう。この時の彼の姿勢を捉えるポイントには「所詮被止御綺_{（御）}候者可然存候」の部分である。このうち傍線を付した「綺」には「訴力」との傍注が記されている。ここに写し取る時、原文書の文字が読み取れなかったため、こうした記載になったものであろう。では、ここではどちらの文字がより相応しいであろうか。仮に「訴」とした場合、それは越前に関するものであるから斯波か朝倉のいずれかによるものとするしかない。また「御」が付せられ敬語表現となっているから、長享以来の宿敵となっている朝倉の「訴」である可能性はない。では斯波義

寛からの「訴」かといえ、敏定はそれを「(浦上則宗が)被止」れることが「可然」しであると存ずる、と述べている。義寛を戴いて活動する立場の敏定が述べる内容ではないであろう。従って、ここに「訴」が入ることは考えにくく、本来「綺」字であったと捉えることが妥当である。これは干渉や口出し、争いなどの意にとるのが普通であるから、敏定は「余計な干渉はやめていただきたい」と述べているのであり、その対象は浦上ひいては細川であろう。

浦上そして上原(そしておそらくは細川政元)が、何故この時、このような働きかけを敏定に対して行なったのであろうか。この延徳三年の意味を確認してみたい。その前提となるのが、長享三年(延徳元年、一四八九)に將軍足利義尚が没し、翌延徳二年には足利義材が次の征夷大將軍となっていたことである。義材はかつて応仁の乱では西軍に担がれていた足利義視の息子であったが、延徳三年の四月二十一日に、前將軍の遺志を継ぎ、近江の六角高頼討伐を行なうことを諸大名に布告した。⁽¹⁹⁾その前段階として、長享段階と同じように再び斯波と朝倉の対立が起こることを懸念した政元が、いわば予防措置を講じようとしたのは確かであろう。

ただもう一点、考えてみたいことがある。一見すると尾張や斯波・織田氏には無関係のように思われるかもしれない

いが、堀越公方足利政知の発病と逝去である。『実隆公記』の同年五月二十八日条にはこうある。

……冷泉丞相(為富) 入来、雑談、次鎌倉殿〔左兵衛督政知、慈照院殿同甲子御舍弟、〕去四月三日薨給、自正月御不食云々、慥注進之由被相語、……

既に正月から政知が発病していたこと、四月に入ってから亡くなったことが分かる。細川政元がこの政知と連携していたことは夙に指摘されており、事実、明応の政変(一四九三)で將軍義材を廃した政元が擁立した新將軍は、政知の息子である義澄(もと義遇。小稿では義澄で統一)であった。そうしたいわば盟友の病臥に政元が示した反応については、三月の北陸下向が、白河から帰路に伊豆へ向かうものであったとする想定や、その直前の二月に計画された富士一覽のための東国下向が政知との会見のためであったとの推定など、⁽²⁰⁾いくつかの見解が出されている。政元にとって、延徳三年の前半は、まず堀越公方府と東国の安定に危機感を抱かざるを得ない時期であったといえよう。本来、東海道に尾張・遠江の領国を持つ斯波氏(と、それを実質的に支える織田・甲斐)の存在は、幕府や政元にとって、堀越公方と東国への支えとして期待されるものではなかったか。⁽²¹⁾少なくとも、その視線が主に越前の朝倉との争いに向けられることは、関東情勢が剣呑となっている時、甚だ

不都合であつたと考えられる。おそらく、實質的に斯波義寛の軍事力を支える織田敏定や甲斐氏に尾張、遠江の実権を認め、それによつて朝倉との抗争からは距離を置く一方、東国への睨みをきかせるためにも東海地方の安定に資するよう働いてほしいとの思惑が、政元やその下の上原父子、さらに浦上則宗らの動きには反映されていたのであろう。

ところが、敏定はそうした動きを「綺」であると斬つて捨てた。彼にそのような強気な対応を可能とさせていたのが、將軍義材の「上意」であつた。Bの論旨を辿る限り、敏定や斯波方が朝倉との関係で自らに有利な進展を「上意」に期待し、それと方向性の異なる細川方からの働きかけを「御綺」として拒絶したことは明らかである。義材が朝倉方に対して厳しい姿勢を持っていたことは『雑事記』延徳三年六月十三日条に

……持是院（斎藤利国）御太刀・御具足等被下之、令出陣可致忠節用意也云々、朝倉者不快云々、

とあることから窺える。斎藤利国（妙純）は美濃に強大な勢力を誇る守護代であり、義材はその力を六角征討に動員しようと働きかけていたのである。ただ、その斎藤氏と姻戚関係にある朝倉貞景については、義材のお覚えが目度くないという。そのことが義材と利国との関係にも微妙に影響していったようである。同じく『雑事記』八月七

日条には

……御動座事、色々雑説共有之、細川相支申六角（高頼）事取申、随而又安富（元家）之所存相替歟云々、就其大名共上洛無一途歟云々、持是院ハ朝倉進退事取申歟、是又上意不弁云々、自江州（六角氏）料足共数千貫上之云々、葉室（光忠）殿方へ自細川五百貫・折紙出之云々、雑説、大略江州事無為之由申之云々、寺社本所迷惑不可有期所者也、尚々可尋記之、又御動座必定之由申方も有之、日数延引無心元事也、……

とある（後半部分については後述する）。利国が朝倉貞景を庇おうとすることが、「上意」に背く行為であるというのである。これは前段に記された、義材の六角征討の意向にもかかわらず政元が高頼を庇おうとしているために、元来は義材の意向に沿つて軍勢の一角となる筈であつた細川重臣安富元家が態度を翻しているし、動員される筈の大名たちも出陣に二の足を踏んでいる、との部分と対になっていて、そのどちらも「上意不弁」のものであるという文意である（それゆえ「是又」の語が入っている）から、義材からは朝倉の存在が、追討対象である六角と同様なものとならされていくことになる。娘婿の貞景を庇おうとして義材から好意的反応を得られなかった利国は、六角征討からも距離を置くこととなつたのであろう。彼がこの時に

近江に出陣することはなかった。

ここで注目したいのは、『雜事記』の同年五月四日条に「公方御動座必定く、越前衆可參申用意也」との記述があることで、当初、朝倉方は將軍の動員に応えようとする姿勢を持っていたらしい。しかし、周知のように実際には朝倉勢の參陣はなかった。ここにはむしろ、義材の厳しい対応によって心ならずも追討の場から閉め出されていた朝倉の姿を見出すこともできるのではなからうか。正しく織田敏定が期待するに相応しい「上意」であるといえようが、注意が必要なのは「種々為 上意一段被 仰出候」とのBの文面である。「種々」の「上意」が義材から伝えられていたという。すなわち単に朝倉方を非とするだけではなく、より複合的な義材の意向が示されていたのである。その内容は、時期を考えれば明らかであろう。

Bが五月三日付であることを改めて想起したい。『蔭涼軒日録』（以下『日録』）の同年四月二十一・二十二日条には

……御動座事、諸家江被仰出、同奉公衆方各々被仰出、
……御動座一定也、廿一日被仰出、……江州御出陣（陣）
之由有其聞云々、……

とあり、義材の六角征討が四月二十一日に発令されたことが分かる。「諸家江被仰出」とあるから、斯波家に対して

も參陣が命じられた筈であり、その直後に敏定が「種々」の「上意」と述べている内容は、まずこれを指しているとも見て間違いない。それが同時に敏定をして朝倉関係の事態打開に期待を抱かせるものでもあった。おそらく具体的な「上意」とは、斯波家に越前支配の正統性を認める（すなわち朝倉方の支配は不当と認定する）ことを一種の条件としつつ、六角征討への參陣を求めたものであろう。敏定が「各致其覚悟候」と述べているのは、義材の意向に従い、自分をはじめ斯波方の武士たちが近江に出陣するとの「覚悟」についてであったと考えれば、Bの文意は一貫したものである。

やや煩瑣になったが、史料Bについて全体を整合的に理解するよう解釈してきた心算である。このように捉えると、この史料が尾張の歴史にとっても興味深い内容を蔵していることが見てとれる。越前の支配権をめぐる朝倉と争い、主家の斯波方を支えてきた織田敏定は、この延徳三年、二つの選択肢に直面することになったのである。一つは、幕府の有力者細川政元の（將軍義材とは異なる）政治構想に乗り、朝倉の立場を容認して越前との関わりは清算しつつ、自らは尾張での実効支配を強め、政元の盟友である堀越公方政知亡きあとの関東にも睨みを利かせる役割を担うことであつた。いま一つは、政元の意向に逆らい、尾

張勢を率いて京都近辺へも出陣して、將軍義材の軍事活動を支える有力な一員となり、その立場から朝倉との抗争を有利に進めようとするのである。これらは真つ向から対立する選択肢といわざるを得ない。こうして整理してみれば、そもそも政元にとっては、斯波方の動員を組み込んだ義材の六角征討自体が、自らの政治構想に最悪のタイミングで計画・発令されたものであったことは明らかである。

しかも、政元にとってさらに悪いことに、この年七月には政知亡き後の堀越公方府で内紛が起き、政知の息子の茶々丸が、異母弟潤童子とその母（義澄の実母）を殺害する事件が起こった。政元にとってみれば、東国政策の基盤が崩壊したことになる。この事件への対処こそ重要であるべき段階で、將軍や斯波義寛・織田敏定らが全く反対に近江に出陣することなど、政元にはあり得べからざる展開であつたろう。だからこそ、前掲の『雜事記』八月七日条の後半に見られるように、政元は將軍の追討対象である高頼と連携し、將軍側近である葉室光忠への買収ともいえそうな工作などによって、追討そのものを有耶無耶にしてしまおうとしていたのである。「雜説、大略江州事無為之由申之云々、……尚々可尋記之、又御動座必定之由申方も有之」という辺りからは、追討の実施自体をめぐって、義材と政元の綱引きが展開されていた様子が垣間見える。そうであ

れば、実際の六角追討では尾張の織田勢が主力の一翼を担っていた（すなわち織田勢の参陣がなければ、義材の六角征討はより困難となっていたであろう）のであるから、敏定が將軍義材に密着する路線を選択し、政元の働きかけを蹴ったことが、この追討を実現させる力のひとつとなつたと評価することも可能であろう。美濃の斎藤利国のように、義材からの強い働きかけを受けながらも参陣しなかつた者もいたのであるから、斯波義寛と織田敏定の参陣はひとつの主体的な選択であつたと見なしてよいであろう。この当時、尾張の歴史は幕府政治の動向や東国の情勢などと連動しつつ、またそれらに影響も及ぼしながら展開していたのであり、その一端を具体的に示してくれる素材として、史料Bは貴重なものといえよう。

五、細川政元の苦境と朝倉方の動き

延徳三年（一四九二）八月、斯波義寛・織田敏定に率いられた数千の尾張勢が上洛し、義材とともに近江に出陣した。²⁶政元による追討阻止の工作は失敗に終わった訳である。將軍が率いる幕府軍の主力を構成した敏定は、六角勢との戦いで功績を挙げる一方、その立場を活かして朝倉方への優位を築こうとした。『雜事記』十月十六日条の

朝倉御治罰事、去十一日被仰出之、武衛（斯波義寛）畏入了、

や、『日録』十月十一・十二日条の記事である

……就越前御下知、武衛賜御内書、（朝倉）貞景御退治云々、織田大和守（敏定）聞于相公（足利義材）云、貞景之二字許如何、改書云、越前国朝倉孫次郎貞景退治云々、如此御改書有之、弥武衛御面目之至也云々、……就越前国御下知御内書事、被仰付伊勢守貞宗書之、以伊勢備中守貞陸被遣左兵衛佐（斯波義寛）殿、蓋朝倉御退治之御下知也、左武衛義寛公則為礼謝參陣、被獻御太刀・御馬并折紙、於御前御一献有之、相公為越前可有御動座之由、有其聞云々、……

などはよく知られていよう。²⁸敏定の主張を取り入れながら、斯波義寛に対して朝倉追討の公式な命令が將軍義材から出され、剩えその將軍自身が朝倉攻めに出席するとの風聞が飛び交ったという。細川政元にとっては最悪の展開であり、その立場は八方塞がりの状態というしかないものである。『雑事記』十月十六日条に「細川右京大夫（政元）近日四国下向事存立云々」とあるのも、そんな状態に追い込まれたゆえの、消極的抵抗か逃避の姿勢を示すものと捉え得るように見える。翌々年には明応の政変を起こし、將軍の首をすげ替え、幕府を掌握したことにも窺えるように

政元の勢力は強大であり、その人物が追いつめられていたというのは奇異に聞こえるかも知れない。しかし、そうした推測を可能にしてくれるのが、C・Dの内容なのではなからうか。

時間的に少し遡るが、まず日付の無いCがいつ頃、上原父子の意向を受けた浦上則宗によってまとめられ、朝倉方へ送られたのかを考えてみたい。前記のように、これはおそらく延徳三年の九月前半くらいまでに作成されたものと筆者は考えている。その手掛かりになるのは、『雑事記』九月二十八日条の記事である。

北国両使注進、朝倉進退事、色々雖及計略、不成弁之間、無力於国可合戦云々、

これは京都から朝倉方へ送られた使者が帰還し、説得工作が不調に終わったことを報告したというものである。使者が「色々雖及計略」も朝倉方は「不成弁」というのであるから、Cの注記である「貞景・同慈視院茂堅固二被仰放候」と一致する。おそらく「北国両使」とは浦上則宗が「同名を一乗江下」した者を指すのであり、彼らが「異見申」して行なった説得が、貞景らによって拒絶されたものであろう。このように見れば、Cはそれを持参した使者が一乗谷での工作と失敗のあと、九月下旬に京都へ戻っているような日程でまとめられた覚書であり、やはり九月前半頃のも

のとするのが無難ではないか。そうであれば、時期的には斯波義寛・織田敏定に率いられた尾張の大軍が近江に進出していた頃に重なる。彼らは將軍義材の六角征討に従うために遠征してきたのであるが、必要とあらば直ちに越前に向かうことも可能な地域に展開している（少なくとも、周圀からはそう見える）ことになる。義材の朝倉方に対する厳しい「上意」（それは前記のように、十月にはより攻撃的な形で表面化するものであったが）を知る者にとっては、朝倉方が対応を誤れば、越前への侵攻が現実化することは容易に想像できたと思われる。「無力於国可合戦」の部分には、そうした危機感を抱きながらも手詰まりとなつてゐる京都の關係者、すなわち則宗や上原父子、そしておそらく政元の焦りと無力感がよく示されていよう。

では、彼らはどのような調停案によつて、事態の悪化を防ぐうとしていたのか。Cの冒頭では「越前国者無相違朝倉殿成敗之事」と、朝倉方に対して現状の越前支配を支持する文言が置かれている。こうした、提案者の上原父子や仲介者の則宗は朝倉寄りであるとの姿勢が強調されたあと、しかし後半になると様相が一変する。まず「二宮者大野郡斗望可申事、但慈視院御覚悟承度候由事」である。二宮氏は大野郡に勢力を持ち、朝倉孝景の越前平定の過程でも激しく争い、そのちも斯波義良（義寛）に与して朝倉

氏に抵抗してきた。⁽²⁹⁾ここではそんな二宮氏の「競望可被停止」が、二宮氏に大野郡を与えて満足させ、それ以上の要求を出させない、という意味で述べられている。朝倉一族の慈視院光玖の「覚悟」がわざわざ求められているのは、大野郡が彼の支配地であつたため、そしてこの調停の結果ではそれを奪われることになるためではなからうか。このCの文意が以上のようなのであるのならば、朝倉氏は越前一国を実効支配している現実を、部分的にでも否定されることになつてしまふ。

さらに問題となるのは、最後の一条、「武衛江貞景御参候而可然候、其以後 公方江御望之儀候者、一年半過候者、上原父子可調法仕之由事」である。これは朝倉方にとっては衝撃的な条文となる。上原父子の示した案は、いずれは將軍にも奉公できるようにはしてやりたいが、当面は貞景が斯波義寛のもとに参仕するように、というものである。朝倉方に対する上原父子の（従つて細川政元の）対応は、明らかに以前（たとえばBの長享段階）とは異なつてゐた。Bにおいては、朝倉貞景が將軍に対して「以忠節奉公罷成」す者である（その点では斯波と同等）ことが、政元による調停の大前提であつた。しかし今回は、当面のこととはいえ、斯波の家臣としての立場に甘んずるように、との話なのである。四年前の調停の際、Bの中で織田敏定

が強く反発し、認められないと強調してやまなかった、朝倉氏を「公方奉公分」という面で斯波氏と同列に置くとの前提条件（しかも、それは政元の「申沙汰」によって、織田敏定の抵抗を蹴散らしながら認定されたものである）を、政元は事実上撤回したことになる。

このように見てくると、冒頭に置かれた、朝倉方による越前支配への支持表明などは、一種のポーズというしかない。その衣の下には、かつてと異なり朝倉方に厳しい条件を突きつける鎧の部分が露わになっている。こうした極端な転換は、斯波義寛と特に織田敏定の強硬姿勢に思惑をつぶされ、その勢力に支えられた將軍義材の独走化や東国情勢の悪化などの難題に直面した政元が、斯波・織田方への妥協を図る（逆にいえば朝倉には厳しく譲歩を求めることになる）ことで局面の打開を求めるしかないと思えた証拠になるのではなかろうか。

しかし、將軍への奉公を通して斯波氏と同格を求めることは、斯波氏から自立して越前を領国とすることの正統性を主張する朝倉方にとっても、譲れない一線であろう。また、実態としても越前国内に非朝倉の勢力圏を設定することなど認められないのは、むしろ当然である。総じてこのCに示される細川側からの「調停」の方針は、応仁・文明の大乱以来、朝倉氏が孝景・氏景・貞景の三代にわたって

築きあげてきた立場と勢力を掘り崩すような要素を孕んだものであったといえよう。だからこそ、Cのあとの注記にあるように、朝倉を率いる貞景と光玖は「堅固ニ被仰放候」と、この案を断じて受け入れられないとしたのである。

注意したいのは、朝倉方にとってはある意味で当然であったこの拒絶（すなわち説得工作の失敗）を、浦上や上原らは「無力於国可合戦」と捉えていることである。この調停がどれほど無理な要求であろうと、それしか斯波・織田方による越前侵攻を防ぐ手立ては無いと考えられていたことに他ならない。それだけ彼らの危機感は一層深かった。従来の経緯を引つ繰り返すような朝倉方の思い切った譲歩無しでは、斯波・織田方に支えられた將軍義材の独走を押さえる手段が見出せないとの認識が、そこには垣間見える。そして、前記のように十月に入ると彼らの不安は現実のものとなり、義材自らが越前への親征を言い出すまでなっていくのである。その直後に改めて、上原父子から今度は直接に朝倉方へ送られたのがDであった。

CとDを比較した時、どれくらいの変化が見出せるのであろうか。二宮の問題については、今度は大野郡の文字が文面からは消えている。しかし、これではなぜ「但慈親院御覚悟之事」となるのか理解できないであろう。これは実態としては慈親院光玖に犠牲を求める、すなわち大野郡の

支配について二宮に一定の勢力構築を認めるよう光玖に譲歩することを求めるといふ文意が籠められていると捉えなければ意味を成さない条文なのである。一方、最後の条文では確かに当面の斯波義寛に対する参仕の条件は消されている。しかし、以前は政元が強硬に支持していた朝倉貞景の「公方奉公」は、相変わらず棚上げされたままであった（義材の反朝倉の姿勢を考えれば当然であるが）。貞景にとっては、斯波義寛との格差を付けられたままでの忍耐を強いられるのである。Dの文面からは、義材の強硬姿勢に歯止めをかけるためには、朝倉方の意向などに関わりなく、とにかくCで示したような犠牲を改めて押し付けるしか方途が無かった上原父子と政元の立場が窺える。その際に上原方が示した厚意は、おそらく血判による起請を申し出るくらいのことであった。

かくて政元や上原・浦上らから掌を返すような扱いを受けた朝倉方は、ここで方針転換を迫られることになる。將軍から疎まれることで事態が悪化したのであるから、今度はその將軍に向けて自らの立場と正統性を訴えることが重要になってくる。それゆえ、ここで「グループの文書群が作成されることも必然となったのである。正しくそれは「起死回生の非常手段」であつた。

六、織田敏定と浦上則宗

その間にも朝倉方にとって事態は悪化する。その大きな要因は、浦上則宗の姿勢であつた。もともと則宗は文明の頃、朝倉孝景を東軍に寝返らせるために活動した一人であり、Bでも細川政元の意向をうけて斯波方への働きかけを行なっていたから、敢えていえば朝倉寄りのスタンスをとっていたように思われる。しかし、近江の陣では彼と織田敏定が將軍義材の軍勢の中心となつて六角勢と戦っており、その中で互いの交流も深まっていたようである。戦火が鎮まっている時には両者が京都で顔を合わせることもあつた。以下、引用する史料は延徳四年（明応元年・一四九二）のものとなるが、『日録』正月二十八日条には

……午後浦作（浦上則宗）来、持以二縉、……乃出盃、
温麵・羹・食籠、三献、行盃者五返、中間以下皆勸盃、
謝詞丁寧、……織田和州（敏定）所謂丁寧、説破浦作、
及晩帰、々後乃以新兵衛、自浦作見贈丹後絹一疋・杉
原十帖、謝詞丁寧、……

との記事が見える。相国寺の蔭涼軒において両者が会い、酒飯を共にしながら言葉を交わして、敏定が則宗を「説破」したという。その内容は不詳であるが、前後の流れを考えると、敏定が朝倉方の非を説き、従来は朝倉寄りであつ

た則宗に、斯波方への協力を求めていることも想像できるであろう。翌日に相国寺の使僧が則宗の宿所を訪ねると、「浦作以宿醒、不対面」という状態であったから、敏定との対話ではよほど酒を過ぎたらしい。それだけ両者の打ち解けあった風情が窺える。その結果であろうか、『雜事記』二月二十一日条に

……越前国事者、浦上（則宗）・織田（敏定）申合、朝倉（貞景）者退国而、屋形（斯波義寛）如元可入国分治定由、口遊云々、珍重事也、……

との記事があり、浦上・織田が協力して越前を朝倉貞景から斯波義寛の手に取り戻そうと画策していたことが窺える⁽³¹⁾。赤松政則の重臣である則宗と、斯波義寛の重臣である敏定は、軍事的・政治的实力はともかく、いずれも守護の被官に過ぎず、本来は幕府の中核で実権を振るうことが奇異に思える者たちでもある。それが手を組んで、有力守護クラスの人事を左右するようになっているのであり、当時の幕府政治のあり方を考える素材としてもこの事例は興味深い。

同じく『日録』三月十七日条には、織田敏定が則宗の主人である赤松政則の旅邸に出向いたとの記事があり、蔭涼軒主の亀泉集証は「碧桃二枝、送藤左（後藤則季・赤松政則の家人）云、屋形（赤松政則）客来、若此花可然者、可

被進赤松公云々」と敏定を迎える赤松側の支度を助けている。桃の花を飾るといふ趣向から推して、この面会は織田（すなわち斯波）方と赤松方との親密さが前面に出る性格のものであると、周囲の者たちには考えられていたのであろう。そして三月二十九日には、近江で敏定・則宗らの軍勢が六角高頼を打ち破った⁽³²⁾。その協調ぶりは一層際立っている。

朝倉方がイグループの文書群を幕府に提出したのは、ちょうどこの頃であった。かつての縁故からであろう、將軍義材の側で活躍している則宗を窓口として、自分たちの正統性を訴える「訴訟」を起こすのである。これについて『日録』四月十日条は次のように記す⁽³³⁾。

……沢甫（沢甫祥恩）来云、昨日、往織和（織田敏定）陳（陣）所、越前朝倉訴訟、浦作執持之、宰公義事無其隠、飯尾加賀守（宗清）亦告之、安富筑後守（元家）亦告之、……云藤田左衛門大夫者、浦作為傍輩、致不義於浦作、赤松（政則）昵近、以之浦作為遺恨、況朝倉事者普代之被官也、直參相府、押領屋形（斯波氏）本国（越前）、致不義緩怠者、豈不鬱憤乎、於浦作者咬牙忍之、自然時者以此旨被達浦作者、為幸、一言亦直白之、則早為矛盾、以故忍之耳云々、……

朝倉の訴訟を「執持」った則宗に対して敏定が怒りを示

しているとの記事内容であり、主に斯波・織田方が則宗の裁決によって不利な立場に置かれたというニュアンスで、これまで捉えられてきた史料であらう。³⁴しかし、それではここまで述べてきた経緯が瞬時に百八十度の逆転現象を起こしたことになる、そのようなことが可能であるのか疑問が残る。また、後述するようなこのちの敏定と則宗の関係、朝倉方の立場なども、この史料をそのように捉えることを躊躇させると思う。そこで改めて史料を辿ってみると、まず確認できるのは、ここで則宗が果たしている役割は朝倉方からの訴訟を受け付け、幕府の審理の過程に乗せたということなのである。では、それ以上に彼が何を行なったか、またそれによってどのような結果が生じたのかについては、どうであろうか。

後半部の「朝倉事者普代之被官也、直參相府、押領屋形本国、致不義緩怠」をどう理解するかが問題となる。普通に考えれば「相府」は大臣を指すのであるから、これはかつての將軍足利義政であり、この部分は文明年間に朝倉孝景が行なった行為を主に指して、則宗の今回の対応の結果ではないことになる。ただ『日録』では「相府」を「相公（参議のこと。当時の義材を指す）」としばしば混同して用いていて、ここでも義材との関係を指す可能性も残る。もし義材についての話となれば、それに「直參」していると

いうのであるから、朝倉貞景は前年来の苦境からは想像できない程の勢いで、その立場を好転させたことになる。いずれの解釈が妥当であるかを判断するための材料として、イグループの文書群を幕府に提出し「訴訟」を行なった朝倉方が、四月十日を挟んでどのような立場に置かれていたのかを物語る史料Aが活かしてくるのではなからうか。

そこでは、「去月十八日、甲斐五郎左衛門尉・雨川両使合力之事、歎申候、近日出張一定之由二候、旁以取乱候」と、六月に越前への「両使」の人選がなされ、七月過ぎにはその派遣が実施されようとしていることに対する不満と狼狽が示されている。これは幕府に提出したイグループの文書群が写ばかりであり、正文を送っていないことへの言い訳として述べられていることであるが、事実として「両使」派遣の取り決めがなされていたことは確認できる。朝倉方からの「訴訟」にも関わらず、幕府からは詰問や強制執行のための使者が送り込まれようとしていたと推測できるのであり、その意味は小さくないであらう。「甲斐五郎左衛門尉」という使者の名前は、かつて越前をめぐって朝倉方と対立していた斯波家の重臣との関連性を推測させる。その人物が越前に、幕府の威光と斯波方の実力を背景として乗り込む事態が現出するのであれば、朝倉方との間で紛争に至る可能性さえ出てこよう。朝倉貞景が「歎申」し「取

乱」すのも当然であつた。それゆえ彼は則宗に対し「御取合奉頼候外無他候」とするしか無かつた。これを見れば、四月十日までの段階で朝倉貞景が急転直下、それまで疎まれてきた義材から「直参」であることを認められていたと判断することは無理である。従つて、『日録』四月十日条で朝倉方が「直参」したとされている「相府」はやはり義政を指すと考えるのが妥当であり、「不義緩怠」として挙げられている具体的内容は孝景段階に遡つてのことであつて、この記事は則宗が訴訟を受理したことによつてどのような結果が生じたのかについては触れていないことになる。ここで敏定が則宗への「怒り」を示しているといつても、それを朝倉有利に事態が推移したためと捉えることは出来ないであらう。要するに敏定は、これまで朝倉方が行なつてきた「不義緩怠」を非難しつつ、そんな相手からの訴訟を「執持」つた則宗への不満を述べているのである。その根底には「傍輩」の「藤田左衛門大夫」から「不義」をなされ「為遺恨」した経験を持つ則宗ならば、より非道な「不義緩怠」を斯波氏に対して働いた朝倉方に対して、敏定がどのような「鬱憤」を抱いているか分かつてくれる筈なのに、という、むしろ則宗の立場や人柄を理解しているゆえの信頼が存するといえよう。その思いが深いからこそ、則宗が朝倉方の訴訟を受けたことすら、怒りの対象となつ

たのである。

だからこそ以後も、敏定と則宗の關係は決裂することが無かつた。この年十月、近江の陣中で、赤松政則の陣営に斯波義寛や織田敏定が招かれたという。

……長谷川話云、去十三日、於赤松陣所請待武衛（斯波義寛）、其宴始于薄暮終于残暁、六献了皆帰、武衛供衆織田兵庫助（寛広）・同大和守（敏定）・同越中守・島田右京亮・山本右京進、武田伊豆守（信親力）殿、同供衆栗屋越中守・山県民部丞、赤松公政則、同出羽守・同新次郎・別所大藏少輔・浦上美作守（則宗）、十四員在坐、……

この『日録』十月二十五日条⁽³⁶⁾によれば、夜を徹して宴がつづいたというから、義材の軍事力を支えている赤松氏と斯波氏の親密な關係が窺われる。敏定と則宗もその座に列していたのである。

以上のように概観すれば、『日録』四月十日条を斯波義寛や織田敏定の不利な立場を伝える史料として扱うことには慎重であるべきであらう。その前後の史料は管見の限り全てが、朝倉方の苦境を窺わせるものなのである。少なくともこの延徳四年の段階では、イグループの文書群の提出による「訴訟」など、朝倉方の巻き返しの努力にも関わらず、將軍足利義材と斯波義寛・織田敏定のラインで形成された

包囲網を打破することは出来なかったと見なすことが必要であろう。

ただ、Aに見える「両使」の実態については、必ずしも朝倉方に対して打撃となるものであったか不明である。『雑事記』十月二十六日条には「自越前両使注進状昨日到来、無殊事之由、納所申之」とあり、時期的に見て、これがAで言及された「両使」かと推測されるが、その動きに特に進展はなかった模様である。その背景には、義材にとつて六角征討が大詰めに入っていたことがあると同時に、細川政元による露骨な揺さぶりが行なわれていたことも影響したのではなからうか。『雑事記』同月十七・二十六日条には

……安富筑後守、江州御代官辞退申、……

……安富ハ去廿一日、自江州帰京、分国四国者共各假（暇）給之了、帰国、凡失面目畢、屋形儀是又不快云々、

……

と見える。安富元家は政元の重臣であるが、この六角征討には細川方の兵を率いて参加しており、三月二十九日の愛智河原での戦いでは織田敏定や浦上則宗を凌ぐ活躍を見せていた。そうした義材の下での奮励ぶりが逆に政元の気色を「不快」にしていたらしい。近江の陣営で彼の統率下にあった細川分国の軍勢が、「各假（暇）給之了、帰国」とほとんど解散状態になってしまうという尋常ならざる事態

の背後には、そんな政元の意思があつたのではないか。これは事実上、元家を政元「御代官」から解任したものであろうし、だからこそ記主の尋尊は「凡失面目畢」と元家を評したのであろう。⁽³⁸⁾眼前で形振り構わず展開された政元の強硬姿勢に、義材にせよ斯波義寛や敏定にせよ、さすがにこの時点で越前遠征というさらなる冒険に突入することは躊躇されたのではないか。しかも、義材にとつてこのあとには次の遠征の標的として河内の畠山義豊征討が控えていたことなどが、朝倉問題への対処を後回しにさせていたであらうことも想像できる。また斯波方としても、『東寺光明講過去帳』に「同年（延徳三年）美濃・尾張両国餓死等」とあることから、この頃、本国尾張で飢饉が起こつていたことが推測できる。近江参陣はともかく、そこからさらに越前に向かい、全面衝突を起こすだけの余力と覚悟は無かつたのかもしれない。これらの事情が相俟つて、「両使」派遣は当面、Aに見られたような朝倉貞景の危惧よりも実効性の乏しい形で実施されたのではなからうか。

このように、当時の幕府政治を構成していた諸勢力の思惑と駆け引きは複雑にいくつもの渦を作つてぶつかり合い、一定の方向性を見出すことが困難な状態に陥つていたと思われるのであるが、その中でひとつの渦の中心に位置し、他勢力の動向にもつよく影響を及ぼしていた存在とし

て、確實に斯波義寛・織田敏定を想定することができるのである。既述のように、従来の理解では『日録』四月十日条などから、この時の顛末を朝倉優位に理解しようとする傾向が強かったと思われる。^④ 小稿では『家記』所収文書と関係史料の整合的な配列や、浦上則宗への注目などいくつかの作業を進め、逆に尾張の軍勢力を背景とする義寛や敏定の活動が幕府政治に強く作用しており、將軍を動かして、実力者の細川政元に形振り構わぬ対応を余儀なくさせるまでに追いつめていたとの歴史像を提示することとなった。従来のような理解が導かれたのは、ひとつには越前支配をめぐる対立が、結局は朝倉氏の戦国大名化につながる結果となっていたことも影響したように筆者は推測しているのであるが、そうした結果は、この延徳段階から直線的に導かれるものとは限らないであろう。小稿のように捉えることによって、却ってこのあとの明応の政変という出来事が、斯波・織田氏や朝倉氏、ひいては尾張や越前の歴史にどのような影響を与えるものであったのか、より明確になってくるのではなからうか。

七、明応の政変とその後

明応二年（一四九三）の訪れを、斯波義寛は期待とともに

に迎えたと思われる。將軍義材との連携を強めて朝倉方へ圧力をかける方略は、まだ詰めめの段階には至らないものの一定の成果を挙げていた。畠山義豊征討のあとには朝倉方との対決を視野に入れることも、あるいは彼と織田敏定の間では想定されていたのかもしれない。だからこそ、彼は近江の陣を撤収したあとも、義材の下に従いつづけたのであろう。義豊を討つために二月十五日に京都を発つて河内に向かった義材の軍勢には、『雜事記』十七日条に

昨日・今日、自御陣書状共到来了、十五日ハ公方（義材）御馬也、先陣畠山（尚順・葉室（光忠）殿、後陣大名ハ武衛（斯波義寛）・讃州（細川成之）・淡路守護（細川尚春）・武田（元信）・赤松（政則）・畠山大夫（尚順）息・一色（義秀）代官、惣而諸勢ハ自京都至八幡列參、善法寺為御所、畠山ハ陣所牧、武田・武衛ハ薪、赤松直二山崎云々、

とあるように、義寛も加わっていた。おそらく尾張の武士たちによつて構成されていたのであろうその軍勢は、『日録』閏四月二十四日条に載せる上月則武の書状に

昨日廿二卯刻、根来衆為始紀河内兩國之勢一万計乎堺隣郷向村并近辺之山々陣取候、左京兆（赤松政則）自身被打出、数刻及合戦候、同申刻敵悉切散、大得勝利候、……又海上亦敵船数十艘浮、富津江執懸候間、武衛北

庄御踐候、於南庄一虎口京極治部少輔（高清力）殿被相拘候、当方之諸軍勢、於諸口突鎗候、皆粉骨無比類候云々、

後四月廿三日

則武判

と見え、戦意も戦力も決して低くはなかつたのである。しかし、こうした斯波方の目論見と期待を打ち碎いたのが、明応の政変であつた。明応二年四月二十二日、足利政知の遺児義澄を擁立した政元がクーデターを起こし、京都を支配下において河内の義材を攻め、閏四月二十五日、これを捕虜とする。前章までの流れを押さえてくることによつて、この事件が斯波氏や織田氏、ひいては尾張にとつてどれほど大きな意味を有したのかを明確にすることができよう。斯波義寛や織田敏定が近江への出陣によつて連携を強め、朝倉貞景を打倒して越前の回復を進めるための最も頼るべき相手としていた將軍は、呆気なく権力の座を追われた。代わつて斯波・織田方が強硬な姿勢で苦境に追い込んでいた、朝倉寄りの政元が主導する新政権が樹立されたのである。このクーデターに際しては、

……於越前、朝倉衆六番分之、每番二千充有之、并一万二千員也、今度為合力一番衆上洛、二千人有之、昨日上原豊前守（賢家）上洛之時、越前衆七八百人從之、

其後左衛門大夫（上原元秀）上洛之時、又越前衆隨之者千余人有之云々、……

と『日録』五月三日条が記すように、朝倉方の兵力が細川氏に味方するために京都に入つていた。前年の近江の陣において斯波方に厚意を示していた義材の姿勢と関連させ、こうした朝倉方の動向を捉えた家永遵嗣氏の指摘は、従うべきものであらう。朝倉方にとつて政元のクーデターは天来の福音であつたといえようし、逆に斯波・織田方にとつては青天の霹靂であつた。両者の立場は百八十度逆転したのである。これ以降、斯波義寛も織田敏定も再び越前回復を策動することはできなかった。政変が起きなければ有り得たかもしれない尾張勢の越前出兵はまったく可能性を失い、朝倉氏は八十年後に織田信長によつて亡ぼされるまで戦国大名としての歩みを進めることになる。

一方、越前を諦めざるを得なかつた斯波氏と、その領国である尾張にとつて現実の歴史となつたのは、永正十四年（一五二七）の義達（義寛の息子）の敗北^⑨までつづく、遠江への出兵と今川氏との争鬭であつた。新行紀一氏は、明応の政変による政元政権の成立とその動揺が、三河にとつてはやがて永正三年（一五〇六）からの今川氏と伊勢宗瑞（北条早雲）による侵攻へと結びついていくことを見出され、地域における動乱と中央政治のつながりを明確に捉えられ

た。⁽⁴⁴⁾この重要な視角は、以後の幕府や各地域の研究にもつよく影響を及ぼしていると思われるが、尾張にとつては斯波氏の遠江出兵がその視角から捉え得る出来事であろう。

ただ、その展開も政変後の諸勢力の同盟関係が、複雑に変化する中で生じていったものである。義材の失脚によって政元に屈服するしかなかった斯波義寛は、五月二十七日になつて、赤松政則に伴われる形で新將軍義澄のもとへ出仕した。⁽⁴⁵⁾この時点での義寛は必ずしも新政権に心服していた訳ではなかつたであらう。一方、以前から斯波領国遠江へと進出しようとしていた駿河の今川氏は、伊勢宗瑞とその甥である当主氏親の下で、義澄の母の仇である伊豆堀越の足利茶々丸を攻めていたのであるから、むしろ新政権の与党である。この頃の斯波氏は遠江をめぐつても苦しい立場に追い込まれていたであらうことは推測するに難くない。⁽⁴⁶⁾ところが、数年後にはその構図に変化が訪れる。新行紀一氏は文亀元年（一五〇一）のものと推定される赤沢宗益（細川政元の重臣）書状が、信濃の有力者である小笠原定基に宛てて、斯波氏の遠江経略を援助するよう求めていることを取りあげ、「遠江をめぐつて細川・斯波対今川という対抗関係が形成されていた」ことを指摘された。⁽⁴⁷⁾既に織田敏定は明応四年に没しており、長享・延徳の時期に展開された勢力関係は過去のものとなつていた。⁽⁴⁸⁾逆に細川氏と

の結び付きを強め、義澄政権に密着していった斯波氏は、永正五年（一五〇八）に京都に復帰した前將軍義材（この時は義植）の措置によつて、遠江守護職を今川氏親に奪われるという憂き目を見る。⁽⁴⁹⁾歴史の皮肉というべきか。こうした事態が、斯波氏と今川氏の争いをより先鋭化させていくのである。

このように見てくると、明応の政変以降、斯波氏や尾張をめぐる情勢の転変はあまりに目まぐるしく、またそれ以前とはギャップが大きい。しかも、遠江の斯波氏と今川氏の紛争は『宗長手記』によつて比較的よく知られている。そのため却つて、そこから決して遠い過去ではない筈の長享・延徳の頃の様相までは、われわれの視線が届きにくい状況があるのではなからうか。しかし、繰り返して強調したいのは、この時期には尾張に拠点を有する斯波義寛や織田敏定といった者たちと、その率いるところの尾張勢が、幕府政治史や周辺の諸地域の動向に大きな影響力を持っていたことが、史料を積み上げる中で仄見えてくるということであり、小稿でもそうした視角から、従来とは随処で異なる歴史像を提示してきた心算である。小稿はその意味で、一見すると各地の分裂と動乱が進行しているような室町時代後期にあつても、地域史を中央政治史と連動させつつより深く豊かに捉えようとする近年の研究動向を、ごく

限られた対象からではあるが、尾張の事例を通して筆者なりに受け止めてみるためのケーススタディである。そのための史料として『家記』所収の文書群が活用できることを確認し納得するために、筆者はこの一文を草した。

《注》

- (1) 近年のものとしては、『新編岡崎市史 第二巻 中世』（一九八九年、岡崎市）第三章「戦国動乱期の岡崎」（新行紀一氏執筆分）、『新修名古屋市史 第二巻』（一九九八年、名古屋市）第六章「戦国の争乱と尾張」（下村信博氏執筆分）、『新編安城市史 一 通史編 原始・古代・中世』（二〇〇七年、安城市）第九章「室町時代」（水野智之氏執筆分）など。
- (2) 拙稿「永正前後の吉良氏について」（『尾張・三河武士における歴史再構築過程の研究（平成十六～十八年度科学研究費補助金研究成果報告書）』（二〇〇七年）。
- (3) 『福井市史 資料編二 古代・中世』（一九八九年、福井市）に翻刻されている。
- (4) 松原信之氏「朝倉貞景と斯波義寛との越前国宗主権をめぐる抗争について」（『若越郷土研究』二二―一六、一九七六年）、重松明久氏「朝倉孝景の任越前守護職をめぐって」（『史学研究』一三六、一九七七年）など。
- (5) 愛知県内の自治体史では、最近の『新川町史 通史編』（二〇〇八年、清須市）第三編第二章「室町時代の新川町域」（水野智之氏執筆分）がこの史料の内容に触れている。
- (6) 『愛知県史 資料編九 中世二』（二〇〇五年、愛知県）収載史料七七七号、七八二号（以下、愛二一七七などのように表記）など。
- (7) 愛二一〇四六、二〇四七。
- (8) 愛二一九七八、二〇五一。
- (9) 愛二一二一〇一。
- (10) 家永達嗣氏『室町幕府將軍権力の研究』（一九九五年、東京大学日本史学研究室）第二部第一章第三節「斯波義廉の斯波氏入嗣と堀越公方」。
- (11) 『愛知県史 資料編一〇 中世三』（二〇〇九年、愛知県）収載史料九二号（以下、愛三一九二などのように表記）。
- (12) 愛三一四二一―一四六。
- (13) 『福井県史 通史編二 中世』（一九九四年、福井県）第四章第一節「応仁の乱と朝倉・武田氏」（松原信之氏執筆分）。
- (14) 筆者は現在愛知県史の編纂に加わっており、『家記』の所収文書に注目したのはその作業の一環としてである。

る。また、中村友洋氏の愛知教育大学二〇〇九年度卒業論文『朝倉家記』所収朝倉孝景文書の検討』の作成指導にあたる過程で同氏と交わした議論は、筆者の認識を深めるための貴重な機会となった。明記して、関係各位に心からの感謝を申し上げる。

- (15) 松原信之氏は前者の立場である。一方、重松明久氏はIの文書が、IVの対立の中で窮地に追い込まれた朝倉方によって「起死回生の非常手段」として提出されたもので、その経緯の中では特に守護任命に関わる御内書や副状は「偽作」と見られる、とする。注四前掲論文参照。

- (16) 愛三―三一―三三。

- (17) 『薩涼軒日録』長享元年十月二十一日条。

- (18) 飯尾彦右衛門尉については『薩涼軒日録』延徳三年十二月二十四日条に「暮夜、為武衛之使、飯尾彦右衛門尉・安孫子右京亮兩人来」などと見え、斯波義寛の家人であったことが推測できる。

- (19) 『薩涼軒日録』延徳三年四月二十一日条。

- (20) 近年の成果では、家永遵嗣氏「明応二年の政変と伊勢宗瑞（北条早雲）の人脈」（『成城大学短期大学部紀要』二七、一九九六年）など。

- (21) 末柄豊氏「細川政元と修験道」（『遙かなる中世』一

二、一九九二年）。

- (22) 家永氏注二〇前掲論文。

- (23) 家永氏注一〇前掲書参照。また、堀越公方が登場する享徳の乱より以前でも、尾張の軍事力が守護の下で関東の戦乱に対応していた事例としては、たとえば永享の乱（一四三八）に際して、守護斯波氏の下尾張勢が関東に出陣していたことがある（愛―一五六八、一五六九）。

- (24) その思惑は、越前支配の安定化を目指す朝倉方の姿勢とも一致する。それゆえ朝倉方も、政元に対して積極的に厚意を示そうとしていたらしい。『大乘院寺社雜事記』延徳三年五月四日条は、美濃の斎藤利国の娘が朝倉のもとに嫁いだこと、そのための朝倉方の費えは二万貫であつたことを記して、「細川今度下向、是又二万貫、惣四万貫下行也、一国反銭在之云々」とつづける。「下行」は本来臣下などへの交付などを指す言葉であるが、これは文脈から見て、朝倉がそれだけを関係者に支払ったとの意であろう。三月からの政元の北陸下向を支えるために、朝倉が莫大な財を使っていたということである。細川勝元が朝倉孝景を東軍に寝返らせるために工作して以来の両家の因縁もあろうが、朝倉が政元の意を迎えるために腐心している様子

が窺える。

- (25) 『静岡県史 通史編二 中世』(一九九七年、静岡県)
第二編第三章「伊豆の上杉氏と堀越公方」(家永遵嗣氏
執筆分)。家永氏注二〇前掲論文。

- (26) 愛三―四一八―四二三。

- (27) 十一月十八日の合戦については愛三―四三二―四三
七。翌年三月二十九日の合戦については愛三―四五一
―四五五。

- (28) この史料は愛三―四二六にも収められている。

- (29) 注十三前掲書など。

- (30) 重松氏注四前掲論文。

- (31) この史料は愛三―四四六にも収められている。

- (32) 注二七参照。

- (33) この史料は愛三―四四七にも収められている。

- (34) たとえば下村氏注一前掲論文、松原氏注四・注十三
前掲論文、家永氏注二〇前掲論文など。その中で、重
松氏注四前掲論文が、史料Aを取りあげるに際して、
Iグループの文書群が幕府に提出されたのちにも「朝
倉方にとり必ずしも事態の好転は望まれなかったと思
われる」と述べられた視点は重要であったと思う。

- (35) 義政は長祿二年(一四五八)に内大臣に、長祿四年
に左大臣に任ぜられている(『公卿補任』)。

- (36) この史料は愛三―四七〇にも収められている。

- (37) 六角高頼は十一月中旬に伊勢に逃走する(『藤凉軒日
録』十一月十五・十六日条)。

- (38) 政元は一方で「持分国々守護代以下、悉以可參江州
之由申付之云々、代官馬頭二可付云々」(『大乘院寺社
雜事記』十月二十二日条)という対応をしていたとい
うが、もともと六角高頼の追討に消極的であったこと
も考え合わせれば、これがどれほどの実効性ある指示
であったか疑わしいと思う。

- (39) 『親長卿記』『藤凉軒日録』などの明応元年二月十五
日条に、義材の出陣が記される。なお、『大乘院寺社雜
事記』延徳四年二月二十一日条は、六角高頼が近江か
ら逃亡したとの風聞(これは正確ではない)や、本文
中にも掲げた、織田敏定と浦上則宗が協力して朝倉貞
景を越前から「退国」させ、斯波義寛を「入国」させ
るとの風聞とあわせて、「大和・川内両国事ハ、可有御
発向、御勢共次第二取向之由聞之」と記しており、義
材が早い段階から六角征討が一段落したあとは畠山攻
めに転戦する予定でいたことを窺わせる。

- (40) 愛三―四四二。

- (41) 注三四参照。

- (42) 家永氏注二〇前掲論文。

(43) 愛三―八五一―八五三。

(44) 新行氏注一前掲書五四五頁以降。

(45) 愛三―四八七。

(46) 家永氏注一〇前掲書三九三頁。

(47) 新行氏注一前掲書五五〇頁。

(48) 愛三―五一七。

(49) 短期的に見た場合、細川政元にとって最も非妥協的な相手であった織田敏定と、その拠点である尾張の地を取り巻く環境は、政変のあと暫く、むしろ安定した状態にあったと思われる。これは尾張と敏定にとって最も危険で敵対的な存在であった美濃の斎藤利国とその婿の朝倉貞景が、政変から半年も経たぬうちに、近江情勢をめぐって政元と対立しはじめた(『大乘院寺社雜事記』明応二年十月二十二日条) ことなどが影響していたためであろう。こうした諸勢力の新たな合従連衡の様子や、それによる当面の政治・軍事状況の変化は、長期的な方向性とは別に検証されねばならないであろう。

(50) 『後鑑』永正五年七月十三日条所収御内書案。今川氏親に対して「就遠江国守護職之儀、鳥目万疋到来候訖」と述べており、これ以前に氏親が遠江守護となっていたことが分かる。